

光の子として歩みなさい。光からあらゆる善意と正義と真実が生じるのです。
エフェソの信徒への手紙 5 章 8・9 節

みなさんも、暗い夜道を歩いた経験があると思います。
街灯が少ない場所では、足元が見えず不安になります。
でも、たったひとつ明かりがあるだけで、周りが見えて、安心して歩けるようになります。
本校の教育目標でもある「光の子として歩みなさい」は、聖書の言葉からの引用ですが、特別な宗教用語ではなく、今を生きる私たちにも通じるメッセージです。
“光”とは、正しさや誠実さ、思いやり、優しさ、希望などの象徴です。
前向きで、人を照らすものの象徴として使われます。
その反対にある“闇”は、嘘やごまかし、誰かを傷つける行動など、心を暗くするものを指します。
では、「光の子として歩む」とはどういうことでしょうか。

たとえば、間違えたときに素直に認めること。
自分をごまかさず、正直でいること。
友達が困っていたら声をかけること。
周りの人を大切にすること。
部活で頑張る姿、あいさつ、笑顔など、
自分の行動が誰かの希望になるような日々のふるまいも、光の歩みの一つです。

昨年の創立記念ミサで、飯野神父様が「バスがきますよ」という実話に基づく絵本のお話をしてくださいました。覚えているでしょうか。
全盲になった男性が、通勤のために初めて一人でバスを待っていました。
通り過ぎてしまわないか、無事に乗れるか、不安でいっぱいの中、ひとりの女の子が「バスがきましたよ」と声をかけ、小さな手でそっと体に触れてバスへと案内してくれました。
その日から、男性と女の子は同じバス停で会うようになり、毎日声をかけ、一緒にバスに乗り、会話を交わすようになりました。
いくつもの季節が過ぎたある春の日、聞こえてきたのはいつもと違う声の「バスがきましたよ」。
それは、女の子の妹でした。「お姉ちゃんは卒業しました」と。
その後は妹から、さらにほかの子どもたちへと「バスがきましたよ」のバトンが受け継がれていきました。
男性は定年までの 10 年間、子どもたちの優しさに支えられてバスに乗り続けることができたのです。
最初に声をかけた女の子は、小学 3 年生でした。
初めはドキドキして勇気が必要だったと言います。

それでも、小学校を卒業するまで続けました。
その親切は、彼女にとって特別なことではなく、自然で当たり前の行動になっていったのでしょう。
男性もまた、その小さな親切を素直に受け取り、感謝しました。

大人に言われたからではなく、子どもたちが自ら行い、つないでいった親切の輪。それはあまりにも自然で、温かいものでした。というお話をしてくださいました。

この絵本にあるように、「光の子として歩む」とは、特別なことをすることではありません。日常の中で選び取る、小さな善意や誠実さの積み重ねです。

その一つひとつが、周囲の人々に光を届ける力となります。

光の子として歩むというのは、完璧な人になれという意味ではありません。

失敗することもあるし、迷うこともあります。

大切なのは、次の一步を光の方向へ向け直すことです。

みなさんの中には、すでに光があります。

「光の子として歩みなさい」という言葉は、あなたの存在が誰かの心を明るくできるということを思い出させてくれます。完璧じゃなくていい。

でも、今日の自分が昨日より少しだけ優しく、少しだけ誠実であろうとするなら、それはもう“光の子”の歩みです。

「光の子として歩みなさい」光からあらゆる善意と正義と真実が生じるのです。
エフェソの信徒への手紙 5章 8・9節